

世間はハーブアーノで

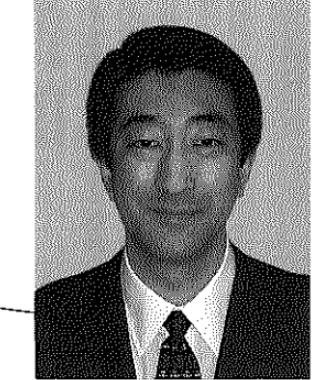
ある。カモミール、レモングラスなどの有名なものから、バラの花を乾かしたものなど、いろいろな植物がお茶として、また匂いを楽しむために用いられる。人間には洋の東西を問わず自然からの恩恵を様々な形で利用しようとする知恵があるらしい。これらハーブは主に西洋で用いられてきたものであり、今ではおしゃれなお茶になっているが、歴史的には薬として用いられてきた。

ドイツの生薬療法は有名であるが、修道院などで栽培され、薬として人民を救済する目的で用いられてきたのである。そうした歴史があるから、生薬を医療用として用いるのも抵抗がなかったのである。イチョウ葉工場、葛根湯は1800年キスはサプリメントとし

て世界中で用いられているが、ドイツでは医療用として医師の処方せんのもので用いられている。

では、これら西洋ハーブと漢方薬の違いは何であろう？それはハーブが主に単独で用いられるのに対し、漢方薬は生薬の組み合わせがその単位になっている。生薬同士

## 慶應大学医学部助教授



# 渡辺 賢治

## 漢方薬とハーブはどう違うの？

### 漢方シリーズ⑧

を組み合わせるという発想は、当然西洋にもあつたはずだが、残念ながらそのレシピが残っていない。なぜであろう。

それは、その組み合わせに対する名前を付けない。なめらかである。一方、葛根湯は1800年

前の『傷寒論』をその原典としているが、生薬の構成はもちろん、その分量比まできちんと記載されている。故に古今、「葛根湯」といえばこの薬、

と誰もが理解できたのである。もしも名前が付かなかつたら、現在このよ

うに幅広く用いられることはなかつたであろう。

生薬療法の歴史は西洋でも非常に長く、紀元前後にディオスクリデスが著わした『ギリシャ本草』の評価は高い。時を同じくして中国では『神農本草經』が著わされて

いる。東西にほぼ同時期に現れた本草書の決定的な違いは、『ギリシャ本草』では単味の生薬を基本としているのに対し、『神農本草經』では生薬の組み合わせを基本としていることである。

その序に、生薬の組み合わせに関する七つの原則を載せている。單行・相須・相使・相畏・相惡・相反・相殺がそれである。組み合わせの起源をたどれば、紀元前2世紀の豪族の墓とされている馬王堆の漢墳墓で発見された『五十二病方』には、既に生薬の組み合わせが記載されている。生薬同士の組み合わせが、漢方の歴史のかなり早い段階で行われたものであることが分かる。詳しくは大塚恭男著『東西生薬考』を参照されたい。

そのほか、『ギリシャ

本草』の分類は自然科学を重んじていて、『神農本草經』の分類は、あくまでも人間に

対する作用をその中心に置いている。すなわち、365種の薬を上薬・中薬・下薬に分け、「上薬は120種あり、生命を養い、毒性がない。長期服用してもよいし、そう

すべきである。中薬も120種あり、使い方次第で無毒にも有毒にもなる。服用に当たっては注意が必要。下薬は125種あり、有毒であるので長期服用してはならない。寒熱の邪氣を除き、胸腹部にできたりこりを破壊し、病気を治す」とある。

さて、そうすると現在の西洋薬はほとんどが下薬ということになる。考え方の違いは面白いものである。